

森井 豊久さん

名古屋鳥類調査会代表



名古屋市港区野跡に、名古屋市の野鳥観察館があります。藤前干潟のラムサール登録以前より、そこでずっと藤前干潟の鳥たちを見て、調査してきた森井さん。藤前干潟の鳥のことは森井さんに聞け、というくらい熟知しておられます。藤前干潟の保全を影から支え、今もなお藤前干潟の鳥を調査している保全の立役者に、お話を伺いました。

■鳥に興味を持たれたきっかけはなんですか？

鳥っていうよりね、動物が好きだったんですよ。小学校、中学校の時はやたらと動物の本を読みたがりましてね。動物園にも行きたがって。それから6年間、京都の方に行ってたんですけど、その頃は動物関係の本じゃなしに普通の小説ばかり読んでましたね。

名古屋に戻ってきて結婚して、子供の写真を撮るのに、兄貴にもらった二眼レフで撮ってたんです。そのうちに子供の動きが速くなってくるから、ということで一眼レフを買ったんですよ。望遠も欲しくなって安いズームレンズも買ったんですけどね。買った途端に子供を連れて鶺鴒の山（愛知県知多郡美浜町）に行ったんですよ。鶺鴒の山行って、ウだけじゃなしにダイサギとかもいたんですが、首の長くない茶色いサギみたいなのがいたんです。それがどんだけ図鑑見ても、何の鳥だかわからなかったんです。後で答え聞けば簡単



ゴイサギ幼鳥（森井豊久氏提供）

なもので、何のことはない、ゴイサギの幼鳥だ、ということがわかって。だけど、そのときはわからなかった。その頃、毎日新聞を取ってたんですけど、新聞に野鳥の会の名古屋支部（現：日本野鳥の会愛知県支部）の例会の紹介が出ていたんですよ。誰でも来てくださいというような感じだったんで、訪ねてったんです。最初は敷居が高くて、しばらく会場の玄関先でためらったりしたんですけどね(笑)。例会でスライドやら観察会の経験談やら順番に回ってくる話を聴いて、それから探鳥会とかにずっと行ってたんです。鳥を見始めたのは、昭和45年で、そのときぼくは30歳だったんですけどね。

■藤前干潟の保全に関わられた辻淳夫氏（NPO 法人藤前干潟を守る会）とお知り合いと聞きましたが？

野鳥の会の名古屋支部に行ってるうちに、鍋田^{なべた}（愛知県弥富市）で探鳥会があったんですよ。辻さんが、ぼくの一か月前の8月に野鳥の会に入ってた、鍋田の探鳥会で辻さんと会ったんですよ。多分、昭和45年の9月ですかね。辻さんの年は、ぼくと同じ年なんですけど、半年くらいはぼくよりお兄さんですね。その頃、鍋田は埋め立てが進んで、仕切ったところに浚渫した泥をどんどんどんどん入れてたんです。その浚渫したものを入れているところへ、ものすごくシギやチドリやスズガモが入ってきてたんですね。珍しい鳥がいるということで、全国からも鍋田に人が来てたんです。そこへはまり込んで見てるうちに、辻さんも社会性を持つ人だから、これで干潟が無くなっていくのはいかんという危機感を持って、ぼくらや名古屋支部に入った同じような年齢の者と、干潟を残さなきゃいかんじゃないとか、かすみ網をやらないようにだとか、なんか運動しなきゃいかんじゃないとかやってましたね。その運動するなら外で、ということで、野鳥の会の名古屋支部から外へ出て、愛知県鳥類保護研究会というグループを作ったんですけどね。

■日本野鳥の会でお会いになる前、伊勢湾台風が襲来したときにも辻さんとは接点があったそうですね。

後から聞いた話なんですけどね、20歳の頃、辻さんは名古屋市南区にあった大同製鋼（現：大同特殊鋼）で働いてたんです。ぼくの実家も南区で、大同製鋼の近くにありました。伊勢湾台風のときはぼくは京都にいったんですが、ぼくんとこ（実家）には弟や妹がいて、この台風で家が流されたんですよ。隣の家の屋根をよじ登って、弟3人と妹1人は助かったんです。この当時、ここら辺（名古屋市港区）から東海市にかけて貯木場がいっぱいあった。この貯木場にいっぱいあった丸太が高潮で転がって来てね。丸太っていったら、ふつうごろごろ転がってくるかと思うけど、縦になってがらんがらん回ってくるんだそうです。そりゃ恐ろしかったみたいで。それで、そのとき辻さんは、大同製鋼で宿直だと言ってたかな。もう真っ暗闇のところだね、「助けてくれー」っていう声が聞こえたんだそうですね。そうすると、丸太にすがった人が流れてくるんでね、それを大同製鋼の建物に何人か上げたと言ってましたよ。この話をずいぶん後になって辻さんから聞いて、「えー、辻さん、あの伊勢湾台風の時に工場におったの?」、なんてそんな話をしたよ。だから、直接じゃないけど、野鳥の会で会う前にどこかに接点は辻さんとあったんですね。

■野鳥の会を抜けて作られた愛知県鳥類保護研究会で鳥類調査を始めたのですか？

愛知県鳥類保護研究会は、通称ちよぼ研と言ってまして、辻さんやらぼくやらぼくの友達やら、メンバーが何人かで集まってできたんです。山階鳥類研究所へ行った真野徹さん



ケリ



シギ・チドリの群れ

というヤンバルクイナを新種として発表した人がいるんですけど、その真野さんを代表に、鳥の観察をしたり、写真を撮ったりとかしてたんですけどね。干潟を残そうというちょぼ研の集まりで会ううちにね、ケリは全国的にみて東海地方に局地的にたくさんいるから、地元のことを調べるためにケリをみんなで調査しないか、って提案したんです。そしたら、辻さんがケリだけじゃなしに、他のシギ・チドリもやったらどうかちゅうもんで、「あ、そりゃ賛成だ」って言って、三河の人たち（東三河野鳥同好会と西三河野鳥の会に属する人たち）も来てくれずいぶんメンバーがそろってね。この干潟の鳥から田んぼの鳥までを、みんな手伝ってくれて、一緒に調査を始めたんです。

そのうちに、シギ・チドリだけの愛知県全部の調査をしようということで、東三河野鳥同好会も、西三河野鳥の会も、ちょ

ぼ研も、個人参加の人もみんなで調査をやるようになったんです。始めは庄内川、鍋田、木曾岬（三重県木曾岬町・桑名市、愛知県弥富市）とかの干潟の鳥をカウントすることから始まってますね。何年か経ってから辻さんが、この調査結果をちょぼ研で「チドリの叫びシギの夢」という冊子にまとめたりはしたんですけどね。

■辻さんとのその頃のエピソードはありますか？

愛知県鳥類保護研究会というのは、はじめは真野徹さんが代表だったんですけど、途中から仕事の都合で真野さんが代表ができなくなって、辻さんが代表になったんです。辻さんは、かすみ網を使わないよという運動もやってたんですけど、まあ、ほとんど7割以上は、いや、もっとかな、やっぱり干潟のことが気になってたみたいですね。途中でぼくもいろんなことがあって、干潟の方から少し離れてたことあるんですけどね。辻さんも伊良湖（愛知県田原市）のサシバの渡りを12年間調査したり、タイへ行ってサイチョウを一所懸命調査してたんですけどね。そのころ辻さんと年賀状をやり取りしてたんですけど、鳥にまつわる川柳が書かれているのを、いまだにぼくは持ってますね。辻さんの往復書簡もずいぶんぼくのところにありますよ。あの人も記念切手貼って、封緘のところへ鳥のイラストを描いてました。あの人のイラストは良いですからね。

そのうち、ちょぼ研に参加してた人がそれぞれ活動を始めて、辻さんは「名古屋港の干潟を守る連絡協議会」という今の「藤前干潟を守る会」の前の組織を作った。

■では、今、代表を務められている名古屋鳥類調査会には、どのように関わられてきたのでしょうか？

名古屋鳥類調査会は、名古屋市の5年に1回の「名古屋の野鳥」の調査のために作られたんですね。第1回目（昭和50年の調査）から、ぼくは調査をやってるんですよ。1回目の調査のときは、まだ名古屋鳥類調査会が正式には



無かって、今、八王子に住んでいる友達が愛知県の鳥獣保護員してたので、最初の「名古屋の野鳥」は名前を借りて鳥獣保護員評議会っていうのでまとめたんですよ。彼はその後、東京の仕事をするって東京へ行ったんですけどね。そうすると5年ごとに「名古屋の野鳥」の調査ができなくて、名古屋市が困るんで、浅沼さん（現在、尾張野鳥の会代表）とぼくを名古屋市へこの友達が紹介したんですよ。で、浅沼さんと一緒に、他にも調査のためと集まってくれた数人で、その名古屋市の調査をやりましょう、ということで始めたんです。名古屋市の調査をやる団体の代表を決めるに当って、市の担当者からまとめ役をやって欲しいと言われてたんです。で、浅沼さんから「会の名前は、尾張でどうだろう」とか言われて、ぼくは「尾張野鳥の会、良い名前じゃない」って言ったんです。で、名古屋市の担当者に「尾張野鳥の会でどうですか」って言ったらね、許可がおりなくて。それで、ぼくの考えていた「鳥類調査会でどうですか」って言ったら、名古屋市の担当者が「頭に名古屋を付けてほしい」って言うもんで、会の名前が「名古屋鳥類調査会」になったんですね。その後、「名古屋の野鳥」は5年にいっぺんずつ出してきて、2回目の調査から、ずっとぼくがまとめ役でやってたんです。だから、ものすごい調査回数やってきてる。

浅沼さんは日本野鳥の会名古屋支部の例会で会ったのが初めてでね、ぼくより後で浅沼さんは日本野鳥の会に入ってるんですよね。鳥とか昆虫とか、あの人独学でものすごく見てるからね、詳しいんですよ。

浅沼さんは、名古屋市の「名古屋の野鳥」の調査は一緒にやってくれたんですよ。他にも名古屋市の事業で写真展をやると、そこへ刈った木を持って来たり、ちっちゃな庭を作ってたね。鳥にやるエサ入れから水場から巣箱もセットで作ってたね、いつも協力してました。浅沼さんは、「尾張野鳥の会」を作って自然観察会をあちこちでやってたんです。

■藤前干潟の埋め立て中止にはどのように関わられたのでしょうか？

西一区の埋め立て予定地、いわゆる藤前干潟の埋め立ての予定地のアセスの鳥類調査をね、名古屋市が調査会社じゃなしに、この藤前干潟を知っとる者にやってほしいゆうことで、野鳥の会愛知県支部（名古屋支部から昭和57年に名称変更）や、尾張野鳥の会や、もちろん名古屋鳥類調査会にも依頼が来てね。だけど、みんないわゆるコンサルの下請はやらんといっって、大体みんな反対してたんです。けど、天野さんって当時、日本野鳥の会の

愛知県支部長だった人がね、市長のお墨付きがあつたらやるって言ったんですよ。で、西尾市長（当時）に干潟の調査をやってほしいという依頼書をもらったんです。それならやりましょうということで、名古屋鳥類調査会と、尾張野鳥の会と、野鳥の会愛知県支部で調査をやったんです。

その調査の後、埋め立て予定地の面積が縮小されて、さらにそこを埋め立てたらどういう影響があるかという影響の予測調査の依頼が名古屋市からあったんです。今回は、名古屋鳥類調査会も、野鳥の会の愛知県支部も断ったんですよ。でも、尾張野鳥の会の浅沼さんだけはやるって言ったんですね。ただ、尾張野鳥の会だけでは、人数が全然足らんですから、西三河野鳥の会の人なんか頼んでその予測調査やったそうですよ。それにはぼくは関わらなかったんですけどね。

で、それが終わった時に、浅沼さんがね、「せっかくこれだけ調査をやったんだから続けてやろう」って言ったんです。でも、続けてやろうって言ったときに、名古屋市の依頼を受けた調査と違って、今度はお金が出ないですからね、今まで調査に参加していた人がごそっと来なくなりましたよ(笑)。ついに、3、4人になってきたときかなあ、ちょうど、名古屋市の「名古屋の野鳥」の調査があつて、藤前干潟の調査を浅沼さんたちがやっていたら、藤前干潟の調査を担当してほしいとぼくが頼んだんです。「代わりに浅沼さんたちが続けてやっている調査にぼくも来るようにします」と言ってね。「名古屋の野鳥」の調査は5年にいっぺんしかないのでからね。それだけの調査では足りんだろうということで、そのうち毎月1回調査をやるようになって、浅沼さんが声かけたその調査は今でも続いてやっています。

■藤前干潟の保全の機運が高まっていたときの話があればお聞かせください。

名古屋市から依頼を受けて、干潟のアセス調査の際に、ぼくたちが調査して出した鳥類調査の資料を見た辻さんが、カワウもウミネコもシギ・チドリも一緒くたでの調査結果になっていることに気づいて、シギ・チドリに注目しないと干潟の重要性が出てこないんだって、辻さんが調査結果をまとめ直して干潟の埋め立て反対の意見をいうのに用いたんですね。鳥類調査をした人の中にはなんで、辻さんのところに資料が行ってそれを使っているって言って、怒った人もいたんですけどね。ただね、名古屋市の方も、名港管理組合の人も環境事業局の人も埋め立てすることに対して強気だったんで、調査した資料を公開して良いんだって言ってた。けれど、調査した資料を丸々利用して、シギ・チドリに注目した分析の仕方では藤前干潟ほど重要なところはないという形で辻さんがものを言ったわけですよ。で、自分の資料でものを言わなあかんというのが浅沼さんやぼくの意見なんですけどね。自分で藤前干潟の鳥を調べて、それをずーっとやってたのはぼくらでなんです。ところどころで三河の人やらみんな大勢集めて、餌を何分間の間に何回とったとかっていう調査や、チドリの糞からゴカイのあごの骨がいくつ出てくるかとかいう調査をしたのが

辻さんなんですね。辻さんの保護活動としては、これらの調査を両方混ぜ合わせて物を買ったり、全国で署名活動をしたり、それからパレードもやった。有名人も辻さんが呼んで、海外からも、C.W.ニコルさんも来て講演してもらったり、干潟の権威を呼んでシンポジウムをいろんなところでやったんですね。

最初シンポジウムをやったのは名城大学の講堂だったかな……。ぼくらは進行の記録係やって、カメラマンもやって、挨拶を最後にさせられて。何回かこういう市民アピールのイベントをやったですね。辻さんの攻め方があったんですね。

■藤前干潟の保全活動の中で他に、印象に残っている事はありますか。

藤前干潟を守る会がアナジャコの巣穴の型を作ったときのことを後で聞いたんですが、初め石膏かなんかでうまくいかなくて、樹脂を穴に流したらいいんですね。3mの深さまで樹脂を流して、固まって掘り出すときは干潮時間だったのが、3mの深さまで掘っていると段々満ちてきて、最後のときなんか、溺れるくらい状態でアナジャコの巣穴の模型を出したらいいんですけどね(笑)。でも、アナジャコの巣穴の樹脂模型が藤前干潟の埋め立ての是非に使えたんだそうですね。あの松原市長(当時)のところにその模型を持ってって、どんとおいて、干潟にこの巣穴がいっぱい空いてて、これは酸素を泥に供給していて、干潟の浄化に役立ってるってね。まあ、アナジャコだけじゃなしに、シジミやらアサリやら、カニの穴もあるし、そういう生き物の穴がものすごく無数に空いてて、海を浄化してるんだって言ったんだそうです。松原さんも教育長まで務めた教育者ですから、そんなに重要な干潟を守ろうということになったのかもしれないね。自分の本にもそうやって書いてますね、松原さんは。

■昔はどれくらい鳥がいたんですか？



シロチドリ (森井豊久氏提供)

昔の藤前干潟の記録見ると、シロチドリが2,800羽とか出てたんです。今では、5羽見るのも大変ですからね。ホウロクシギでも藤前干潟には昔は30数羽、鍋田干拓でもホウロクシギが70数羽いたね。前は弥富野鳥園の東側の水路に80~100羽というキョウジョシギが来たんですけど、あそこ河川改修してからね、下の砂利がなくなっちゃったんで、もうキョウジョシギが入らなくなっちゃった。昔は、飛鳥干潟の捨て石のところにもキョウジョシギが50羽くらい入っていたんですけど、捨て石を埋めてその上に堤防の平場を作ってから入らなくなっちゃったんですね。

藤前干潟で昔と比べて減った鳥としては、シロチドリやキョ



キョウジョシギ

ウジョシギの他に、オオソリハシシギやホウロクシギ、チュウシャクシギなどがありますね。オオソリハシシギは昔 300 羽くらい飛来したけど、今は 50 羽くらいかな。ダイシャクシギはあまり数変わってないですね。反対に昔より増えた鳥としては、魚を食べるカンムリカイツブリやミサゴ、カワウとかですかね。季節風の影響で渡りのコースが変わることはありますけど、数が減って心配な種と、そうでもない種がいますね。

最も珍しかったのは、昭和 40 年頃、飛島干潟にコオバシギが 50 羽入ったことかな。渡りのコースがずれて入ってきたと思うんだけど、あれはヨーロッパの方にいるやつですからね。野鳥の会の例会で発表したら、「すごい！」と言われ、会の人も確認しに来てるんです。野鳥誌にも紹介されたかな。他に、藤前干潟ではフラミンゴが見られてるんです(笑)。昭和 50 年に西 5 区でチリーフラミンゴが 2 羽確認されたことがあってね。他にオオフラミンゴやベニフラミンゴがいたかな。一番多い時期で、そのどちらか 1 羽とチリーフラミンゴ 2 羽と合わせて、3 羽のフラミンゴが見られたことがあったんですね。2000 年まで見れたんです。どれかわからんですけど、そのうち 1 羽は、長島スパーランド（三重県桑名市長島町）あたりに当時あった大温室から逃げたものであるのは確からしいですけどね(笑)。



藤前干潟で観察されたフラミンゴ
(森井豊久氏提供)

■今までずっと藤前干潟の鳥を調査し続けることができた理由は何なのでしょう？

いろいろこう人が入り乱れているんですけど、基本的には辻さんも浅沼さんもぼくも、近藤さん（尾張野鳥の会の当初からの会員）も、みんなずっと鳥を好きというか、観察するのでずっと繋がってて。仲間なんですよ、グループ。ほんとね、狭いところで繋がってるんです。

■環境省の鳥獣保護区管理員としても藤前干潟に関わってきてみえますが。



カウントをする森井氏

藤前干潟が国指定の鳥獣保護区になって以来、鳥獣保護区管理員として毎月数回、鳥のカウントをして、報告してます。保護区に指定された当時は、日光川排水機場辺りでカモを鉄砲で撃っている人なんかもいましたね。

ぼくがこころがけていることは、藤前干潟でも、どんなところでも、まず鳥や環境の状況を知るために一番重要なデータとして、鳥の種類と数は把握しなくちゃいけない、ということかな。一番単純

な「鳥の種類」と「鳥の数」を知るということが大事なんです。どれだけ学術的に優れた研究をしても、基本となるものが鳥の種類と数を知ることなんですよ。過去との環境の変化を知るのにも欠かせない。これが一番大事なことなんですよ。

だから、名古屋市野鳥観察館で働いて、お客さんの対応をしている時間以外は、鳥のカウントをしてるんです(笑)。シギ・チドリとかの渡り鳥にとって、日本や世界の中で藤前干潟がどれくらい重要な位置をしめているか、ここにどれくらいの渡り鳥が来ているのか、というのをいつも気にしていますね。

■今後、藤前干潟がどのようになっていくと良いと思われていますか？

藤前干潟が守られてから10年が経ち、今は、守られた状態というのが当たり前になってしまっているんですね。すでに守られた場所を、さらに守っていかなければいけない、と叫び続けて、でも一般の人たちの興味を引き続けるのには限界があるとは、感じて。藤前干潟に人を呼ぶためには、観光という要素も少しは必要なのかもしれない。

ただ、藤前干潟には、小学生などの子供たちが学校でたくさん来てくれてるからね。ここを大事にしたいと思ってるんですよ。うまいこと、藤前干潟を発信して、鳥をどうか多くの人に見てもらいたいと思ってます。

環境のことでいえば、全国の中で、藤前干潟には鳥がたくさんいる状態が続いてほしいと思ってるんです。九州の干潟とかには、どうしても負けちゃいますが、本州の中では、やっぱり藤前干潟は多くの鳥が来る場所ですからね。そのためには、庄内川に、山などから天然の有機物が流れてきて、鳥の餌の状態が良くなって欲しいと思う。



2002年、ラムサール登録記念フェスタ（稲永公園）でお話する森井氏（森井豊久氏提供）

2012年7月

聞き手：佐藤祐一（名古屋自然保護官事務所自然保護官）

野村朋子（自然保護官補佐）

森井豊久（もりいとよひさ）



昭和14年3月8日、愛知県名古屋市港区真砂町（現：港区名港2丁目付近）生まれ。名古屋鳥類調査会代表。